



染色体はDNAとヒストンを主成分とする多糖類のタンパク質より構成される極めて複雑な構造体である。DNAとタンパク質の複合体がクロマチンで、クロマチン高次構造のゲノム部域に差異があり、分染法で得られるバンドはゲノム上での部域ごとの構造上の差異を利用して染め分けられるとされている(中村ら, 1976)。これまでの核型分析は、細胞分裂周期における中期における数と形により行なわれてきたが、最近では染色体の中身を考慮して形態をとらえ、機能に關与した形態を対象にして研究するようになってきた。染色体の形成は細胞の生理状態に対応しているから厳密には中期にも幅があり、この種の研究には先ず正中期の把握が必要である。Table. 1に本邦の栽培種の一つである‘一ノ瀬’生長点部位の分裂中期染色体No.1-28のそれぞれの染色体長とその核型を示した。かかる品種の最大染色体は $4.6\mu\text{m}$ 、最小は $1.0\mu\text{m}$ で、平均は $1.88\pm 0.81\mu\text{m}$ であった。そして核型は $2n=28=5A+23B$ と示された。

Ag-I (N-band) 法は仁形成部を特異的に染めだす方法として開発されたものである(Funaki et al., 1975)。クワ染色体において本方法を用いた結果、分裂後期のM染色体(大沢, 1961)上に特徴的なバンドを見いだすことができた。両者は明らかに非相同で雑種起源とする特徴を有していた(Fig.1)。

#### 4. 結論

以上の結果からN-band法は‘一ノ瀬’のNo.1, 2染色体を特異的に分染することが明らかになった。バンドは原理の異なる方法で染色してもおおむね同様に得られる可能性があり(Holmquist, 1989, 1992)、他の品種系統についても検討する必要がある。